

[研究ノート]

韓国語の社会文化的特性に基づいたコミュニケーション機能別の言語項目表の試み
- 日本語話者のための大学教材開発の予備的考察 -

**Matching linguistic items with communication functions based
on sociocultural characteristics of Korean**
- A preliminary study on making a university textbook for Japanese speaking students -

南 潤珍
Yunjin Nam

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 本稿は、日本の大学で使う韓国語教材の開発のため、韓国語の社会文化的特性を反映したコミュニケーション機能と韓国語の言語項目の対応表の作成を試みるものである。2章ではCEFRを参考しつつアジア諸言語における社会文化的適切性の評価基準を提示した先行研究を紹介し、3章では韓国で提案された、韓国語教育用のコミュニケーション機能別リストを検討する。4章では、2つの表を統合・調整し、大学生のための韓国語教材で取り上げるべき韓国語の社会文化的特性を反映したコミュニケーション機能をリストアップする。そして各コミュニケーション機能に関連言語項目を対応させる。また、対応表の作成における注意点を検討すると同時に、対応表の作成で見えてくる韓国語の社会文化的特性をも再確認する。最後に、残された課題と本稿の意義をまとめる。

Abstract: This paper attempts to implement a matching list of Korean language items with communication functions that reflect the sociocultural characteristics of Korean, in order to develop a Korean language textbook for Japanese university students. Section 2 introduces a previous study that presented a CEFR(2018)-based list of evaluation criteria for sociocultural adequacy in Asian languages. Section 3 examines the list of communication functions in *International Standard Curriculum of Korean Language*. In section 4, a communication functions list that reflect the sociocultural characteristics of Korean is set up. Then, the related language items are matched with each communication function. In addition, some points of matching are discussed. Finally, Chapter 5 summarizes the remaining issues and the significance of this study.

キーワード: CEFR, 韓国語学習、社会文化的特性、大学教材、言語項目

Keywords: CEFR, Korean language learning, sociocultural characteristics, university text, linguistic items

1. はじめに

本研究は、言語学習を言語使用の1つと捉える「ヨーロッパ言語共通参照枠組み(Common European Framework of Reference for Language)¹の言語・言語教育観に基づき、日本の大学における韓国語教育の実践方案を模索するものである。

CEFRでは言語使用を以下のように定義する。

(1) 言語使用とは、①言語活動だけでなく、言語活動のベースとなる②「言語によるコミュニケーショ

¹ 「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」は2001年に公開されてからEUのみではなく、世界各国の言語教育に拡大しつつあるが、2018年に発表された改訂・追補版では、異文化・異言語コミュニケーションにおける社会文化的側面が強調されるなど新たな観点、方向性が提示されている。以下では、必要に応じてCEFR2001またはCEFR2018またはCEFRと示すことにする。

ン能力²、実世界における③「一般的な能力³」、そして言語活動を行う際に関与する要素である④「言語活動の領域・テキスト・方略・タスク」が総合的に関与して行われるものである(CEFR2018. pp.29-30)。

そして言語学習も言語使用の1つであるとし、実際の指導や教材・カリキュラムに開発においてはこれらの相互関連性についての理解が基盤とならなければならないと述べている(投野 2013:13)。結果的に言語学習には、コミュニケーション能力、一般的な能力、言語活動の構成要素についての能力をバランスよく身につけることが要求されるようになり、コミュニケーション能力においても言語構造の知識に加えて社会文化的適切性を身につけることが強調されるようになった。

本稿では、言語使用・言語学習に対する CEFR のこうした考え方にに基づき、大学生用の韓国語教材開発の材料となる韓国語の社会文化的適切性の指標と、その実現に必要なタスク・機能、それに用いられる言語項目の組み合わせを試みる。その手順の詳細は以下の通りである。

- (2) a. 先行研究で提案された、アジア諸言語のコミュニケーションにおける社会文化的適切性の評価基準、そして関連タスクのリストを検討する(2章)。
- b. 韓国の『国際通用韓国語標準教育課程』で提案された、韓国語教育のためのコミュニケーションタスク・機能リスト及びその学習レベルを検討する(3章)。
- c. 日本の大学生のための韓国語教材で取り上げる社会文化的適切性の評価基準とその実現に必要なタスク・機能および言語項目のマッチングを行う。また、そのマッチングにおける注意点や課題を語彙・文・談話レベルに分けて検討する(4章)。

(2)の過程において本稿で注目するのが、学習者の属性である。外国語学習においては、学習対象である外国語社会の社会文化的特性や言語構造の知識が強調されるのが当たり前のようになっている。しかし、実際の学習、特に成人学習者の学習は、学習対象と自分の母語・母社会との比較を通じて進められることになるため、学習者の属性、すなわち日本語社会の社会文化的特性および日本語の構造についての理解に基づかないと、韓国語社会や韓国語の特徴の理解に到達することは難しいと言える。

2. アジア諸言語の社会文化的特性を反映したコミュニケーション能力の評価表

アジア諸言語の多様な社会文化的特質を背景に、CEFRをアジア諸語へ適用する際に考慮すべき点として富盛・Yi(2017)、岡野・他(2018)では、TUFS言語モジュールの機能シラバスを対象に個別言語の社会文化に関与的な指標を抽出した。なお富盛(2020)では、これらの指標を材料にアジア諸語版「社会文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価表」を作成した。この評価表は、①言語行動のタスク、②社会文化的方略、③CEFRの目安、④能力を判断する手がかり(descriptor)、⑤個別言語の社会文化的特質の補足的説明(supplement)で構成される。韓国語の評価表は以下の通りである。

² CEFR では、言語によるコミュニケーション能力を①音声・文法・語彙などの言語構造に関する能力、②社会言語的能力、③言語運用能力で構成されるものと定義している。

³ 一般的な能力は実世界に関する①知識、②技能、③姿勢や態度で構成される。

表 1 韓国語の社会文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価表

言語行動 タスク	社会・文化方 略	CEFR 目安	能力を判断する手がかり (Descriptors)	韓国語の社会・文化的特質の補足的説明 (Korean Supplements)
挨拶する	適切な表現で 人間関係を良 好に保つ	A1	人間関係に応じて、定型句など失 礼にならない程度の挨拶表現を使 うことができる。	朝、昼、晩の挨拶の定型表現が同じであるため、基 本的な定型表現は単純である。その場を離れる際の 表現の使い分けを必要。
		A2	場面に依じて適切な、定型句では ない挨拶表現を使うことができる。	基本的な定型表現の代わりに食事や用事の確認など の表現を用いることができる。
会話する	適切な表現で 人間関係を良 好に保つ	A1	相手との関係を円滑にするために 固有名や職位などの使用ができる	人称代名詞をあまり使わない。
		A1	相手との心的距離を縮める適切な 呼称を使える。	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさ ん」といった親族名を使って相手と呼ぶ。
		A1	相手との関係や場面により格式体 と非格式体の使い分けができる	終結語尾の使用により格式体と非格式体の差を区別 することができる。男女の違いはあまりない。
感謝のや り取りを する	適切な表現で 人間関係を良 好に保つ	A1	感謝の定型句とそれに応える定型 句を使うことができる。	感謝は一度に大きく言い、後日、改めて言うことは 少ない。
自己紹介 のやり取 りをする	相手との距離 を縮める	A1	相手の年齢を聞くことができる。	相手の年齢に応じて、敬語など言葉が変わるため、 円滑なコミュニケーションのためには年齢情報が必要 である。
		A1	家族構成などプライベートなこと を聞いて、または返答ができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離 を縮めた上で、入手した情報をもとに今後のコミュ ニケーションにも活用しより良い関係構築を行う。
		A1	相手の住んでいるところを確認で きる。	具体的かつ個人的なことを話したり聞くことで距離 を縮める。
		A1	自分や相手の出身地、出身校など について情報を求めたり与えるこ とができる。	同窓や同郷の場合、仲間意識、共感が強まり、それ によって付き合い方や言語使用などが変わる。
		A1	自分や相手の職業について情報を 求めたり与えることができる。	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のた めに必要。
		A2	卒業年、誕生年、干支等を聞くこ とができる。	単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によ って卒業年や干支等、聞き方を変えることもある。
褒めのや り取りを する	適切な表現で 人間関係を良 好に保つ	A1	相手の外見、言動で気付いた点を 一言、ほめることができる。	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を単語一言で 良いので、コミュニケーションのきっかけとする。
謝罪のや り取りを する	適切な表現で 人間関係を良 好に保つ	A1	謝罪する、または謝罪されたとき に、定型句を使ってやり取りする ことができる。	謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であつ ても、まずこちら側が許すということを伝えるのが 一般的な行為。

(売買などで) 交渉する	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A2	市場などでものをかう時、値段、数量や品目の交渉ができる。	市場等での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。
依頼・勧誘・提案に対する意思表示をする	対話者の心理をつかむ	A2	礼儀正しく依頼、勧誘・提案を受け入れることができる。	場面によってはすぐに勧誘や提案を受けるのではなく、数回遠慮した後に勧誘・提案を受け入れることもある。親しい関係では素直に受け入れる。
		A2	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	受け入れるか断わるかを分かりやすく伝える。丁寧に断り、断りの理由を添える。
依頼・勧誘・提案をする	対話者の心理をつかむ	B1	適切な表現で依頼・勧誘・提案することができる。相手の反応から相手の意図を把握し適切に反応することができる。	対価を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現ができる。間接的な拒絶・受け入れなどもあるのでその意図把握の必要がある。
趣味・好みを話題にする	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A2	相手の趣味や好みを確認できる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮める。
謝罪のやり取りをする	対話者の心理をつかむ	B1	適切に謝罪したり応じることができる。	場合によっては提案を提示することもある。親しい関係での些細なことに関しては明確な謝罪はせず、相手の気持ちに対する共感表現を使うことが多い。
文章を書く・理解する	文体差で発話場面に最適化する	A2	相手を想定しない文書や指示文を書いたり理解することができる。	終結語尾の使用により格式体と非格式体の差を区別することができる。新聞記事や公文書などの文体を使い分けができる。
文章を書く・読む	多様な文体を用いて効果を上げる	B1	メールや手紙などにおいて相手との関係や脈絡に合う、丁寧かつ気持ちが伝わるあいさつが書ける。	対話者との距離を縮めることができる。
		C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉特有の表現や定型文がある。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉の適切な使い分けができる。	話し言葉と書き言葉では文末だけでなく、副詞や代名詞なども異なる。
		B2	聞いた内容を伝えたり自分の体験を目撃したかのように話すことで臨場感のある表現ができる。	2つの場面を1つの文に表現する韓国語の文の特徴を理解し、使うことができる。用言1語の活用形で表現され、人称や待遇法が変わる。
		B2	相手の理解を深めるために慣用句を効果的に使用できる。	自他双方が自身の意図の理解促進のために使用することわざや慣用句の高度な運用。
		C1	婉曲的な表現・反語的表現・ユーモアの理解、使用ができる。	皮肉・反語法などを使うことで親近感を表現したり、場を和らげようとする場合が多い。
		C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発信できる。	韓国の社会・文化に基づく笑いのツボや言葉遊びの理解と運用。
	社会・文化の差異を理解できる	C2	タブーとされる話題を避ける・スラング・悪口に適切に対応することができる。	注意を要する話題＝地域差別・出身学校差別など若者は悪口やスラングをたくさん使う傾向があるため、それに対する自分の戦略が必要。

仲裁する	社会・文化の 差異を理解で きる	C2	韓国話者言語の社会・文化の差異 を理解し、ビジネスやトラブル解 決などの場面で効果的な仲裁がで きる。	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異など を理解し、ストラテジーに則した形で効果的にコミ ュニケーションを行う。
------	------------------------	----	--	--

3. 「国際通用韓国語標準教育課程」の韓国語学習のコミュニケーション機能に関する記述

「国際通用韓国語標準教育課程(以下、国際通用)」は、2010年から2017年まで韓国語院で開発されたものである。韓国国内や世界各地で行われている韓国語教育に対し、標準的なカリキュラムと教育資料の提供を目的として、①レベル分け⁴、②レベル別の目標記述、③教授テーマ、④コミュニケーション機能(function)の記述、⑤言語知識や言語行動のスキル、文脈運用の詳細、⑥文化能力の記述、⑦評価の基準及び方法で構成される本体に語彙リスト・文法項目リストの言語資料が付いている。

各レベルの目標記述では、言語使用や言語学習における社会文化的適切性についての部分的記述がある⁵。そしてHalliday(1973)やvan EK, J.A.(1980)、van EK, J.A. & Trim, J.L.M.(2011)⁶を参照し、韓国語学習に必要なコミュニケーション機能リストを抽出し、韓国語教材の分析結果との対照及び専門家による定評を経てレベル別のコミュニケーション機能リストを表2のように提示した。

表2 「国際通用」韓国語コミュニケーション機能表

区分		レベル						区分		レベル					
大 範 疇	項目	1	2	3	4	5	6	大 範 疇	項目	1	2	3	4	5	6
情 報 の 要 請 と 伝 達	説明する				●			態 度 表 現	問題提起する					●	
	陳述する						●		意図表現する					●	
	報告する					●			望み・希望・期待を表す		●				
	描写する				●				可能・不可能を表す		●				
	叙述する			●					能力を表す		●				
	記述する						●		義務を表す		●				
	確認する		●						謝る	●					
	比較する				●				拒絶する				●		
	対照する			●					満足・不満を表す				●		
	修正する				●				心配を表す				●		
	質問応答する		●						悩みを表す					●	
	提案する	●							慰める				●		

⁴ レベル分けは、初級(1級、2級)、中級(3級、4級)、高級(5級、6級+)としているが、上級は5級と6級以上を含める開放型に設定されている。

⁵ 初級の目標には日常生活の問題解決、中級の目標には馴染みのある社会的コンテキストでの問題解決及び日常文化や行動文化への理解が挙げられている。そして上級では、馴染みのない社会的コンテキストでの問題解決及び多様な行動文化、成就文化、観念文化の理解を通じて文化の多様性や特殊性についての理解を目標と設定している(金重燮(2017):15-16)。

⁶ Halliday(1973). Explorations in the Functions of Language. London: Edward, van EK, J.A. & Trim, J.L.M.(2011). Vantage. Cambridge University Press., van EK, J.A.(1980). Threshold level English. Oxford: Pergamon Press.

説 得 と 勧 告	勧誘する			●					不評・不満を表す				●			
	要請する		●						後悔する			●				
	警告する				●				安堵する				●			
	忠告する・求める				●				驚く			●				
	助言する・求める			●					好みを表す			●				
	許諾する・求める		●						喜怒哀楽を表す		●					
	命令する	●							心情を表す					●		
	禁止する		●						挨拶する	●						
	注意する						●		紹介する	●						
	指示する				●				感謝する	●						
態 度 表 現	同意する				●				お祝いする	●						
	反対する				●				ほめる			●				
	否認する				●				歓迎する		●					
	推測する			●					呼びかける	●						
								社交活動								

ここに提示された52の機能は、表1の言語行動タスクに当たるものであり、表1と表2の共通の項目は黄色で表示した⁷。それぞれの目標が異なるため、通言語的な観点から言語使用の社会文化的特性に焦点を当てる表1では社会文化的特性が現れやすい項目だけが提示されているのに対し、韓国語学習の汎用的基準を模索する表2では韓国語のコミュニケーション機能が網羅的に提示されている。そのため、共通項目は一部に限られている。そして表1では、ひとつのタスク(機能)が「能力判断の手がかり(descriptor)」によって細分化しているが、表2では、むしろ52の機能を5つの大範疇に束ねている。しかし各機能のレベルを1つに限定せず、ある機能が使われるレベル(オレンジ色塗り)と重点的に学習されるレベル(●で表示)を合わせて提示することで、各機能(タスク)の細分化の余地を残している。

4. 大学教材における韓国語の社会文化的適切性の具現: 言語項目の抽出及びその記述

4.1. 韓国語の社会文化的適切性を実践する大学教材開発の前提

ここからは上で紹介した韓国語の社会文化的適切性に関与するコミュニケーション機能を大学生用の教材に取り入れるため、各コミュニケーション機能と言語項目のマッチングを試みる。この作業においては以下の3点に注意する。

(3) a. 言語学習の構成要素として知識・理解と機能・実践を区別する

: 社会文化的特性を反映する事象には、知識や理解を通じて社会文化的適切さが担保されるものと、身につけた機能を実践することで社会文化的適切性が得られるものがある⁸。社会文化

⁷ 「国際通用」では「機能」を「タスク」の上位概念としている。タスクは談話参加者の特性・関係・コミュニケーションの状況などによって定義される具体的な行為にことであり、機能は複数のタスクに共通する抽象的な概念を指し示す。表1のタスクは、「国際通用」の「機能」に近い用語であるため、以下では「機能」を術語として使用する。

⁸ 例えば、大学生の学習者にとって商取引において店の人が取りかける言語行動は、理解さえできれば十分であり、実践の必要性はない。一方、店の人に対し適切な単語を選んで呼びかけるためには、理解(知識)と実践(使用)の両方の能力が必要である。

Matching linguistic items with communication functions based on sociocultural characteristics of Korean
－A preliminary study on making a university textbook for Japanese speaking students－（Yunjin Nam）

を構成する全ての部門の機能・実践を学習者、特に大学生がこなせることは現実的に難しい。全ての項目や内容に対して同じ水準の知識理解と機能実践を要求するのではなく、学習レベルや学習者の特性に配慮した選択または比重の調整が必要である。

b. 韓国国外の大学という学習環境に適した学習項目・学習内容の設定が必要である。

：a.とも関連するが、韓国国外で行われる韓国語学習でのコミュニケーションは、教材、メディアなどを通じた間接的・疑似的なものがほとんどである。機能の実践がロールプレイに留まるのではなく、中身のある社会的体験にする工夫が必要である⁹。また、知識・理解は異文化コミュニケーションの土台を形成していくことも重要である。

c. 日本語の構造、社会文化的特性との対照言語学的観点から学習項目や内容を構成する¹⁰

：成人学習者の外国語学習には、常に母語や母文化との対照が起きると言われているが、日本語と韓国語は語彙・文法・言語使用・社会文化の面で類似点が多いながらも微妙なずれがあるため、注意が必要である。特に言語構造の面では同じであるが、社会文化的適切さの評価では異なるケースも多いので、「似ていて異なる」部分を把握し対応する能力を高める必要がある。

4.2. 社会文化的特性を反映するコミュニケーション機能と言語項目の対応表

ここからは、韓国語教材開発のために作成した社会文化的特性を反映するコミュニケーション機能と言語項目の対応表について述べる。まず、表 1 と表 2 を材料として社会文化的特性を反映するコミュニケーション機能を抽出した。前述の通り、表 1 と表 2 に共通するコミュニケーション機能は 12 項目のみと少なかったため、2つの表のコミュニケーション機能を合わせることにした。そして表 2 のようにそれぞれの機能を話し手・聞き手・命題の関係に基づいて7つの大範疇に分類した。ところが表 2 のコミュニケーション機能の中には、複数の言語項目の連鎖またはその意味の組み合わせによって実現されるため特定の言語項目と結び付けることが難しいものが多数あったためマッチングから除外した¹¹。その結果、(4)のようなコミュニケーション機能のリストが確定した。

- (4) a. 社交活動 (挨拶する、会話する、自己紹介する、お祝いする、感謝のやり取り、歓迎する)
- b. 説得と勧告(命令する、許諾する、禁止する、否認する、助言する、忠告する、警告する)
- c. 態度表現(褒めのやり取り、謝罪のやり取り、趣味・好みを話題にする、推測する、望み・希望・期待を表す、義務を表す、可能・不可能を表す、能力を表す、(売買などで)交渉する、依頼・勧誘・提案を受け入れる、依頼・勧誘・提案を断る、依頼する、勧誘する、提案をする、意図表現する)
- d. 情報の要請と伝達 (確認する、質問応答する、修正する、対照する、比較する)
- e. 感情表現(慰める、満足・不満を表す、後悔する、心配を表す、悩みを表す、不評・不満を表す、驚く)
- g. 書き言葉と話し言葉の区別(文章を書く・理解する、文章を書く・読む、文章を書く・口頭で

⁹ 教室でペアを組んで行う教科書のスキット練習や朗読、暗唱などは言語構造的機能の習得には効果的であるが、社会文化的特性が反映されないことが多い。留学生との交流や地域社会での活動、ネット交流など実際の社会活動の機会を提供する必要がある。

¹⁰ 日本の学習者の置かれた言語・社会文化的状況の特性に注目する必要があるについては、多くの研究で指摘があった。その一つである李・南(2018)によると、日本の韓国語学習者向けの検定試験と世界の韓国語学習者向けの検定試験とは目標設定、学習時間、言語知識の量など様々な面で異なるとの指摘があった。

¹¹ 例えば「感情表現」範疇の「喜怒哀楽を表す」に関与する特定言語項目の特定は難しい。

表現する、文章や話を理解する)¹²

(4)のリストに対し、その遂行の際に使う言語項目をマッチングさせた。言語項目は、①語彙、②助詞、③文型、④(用言の)活用形、⑤複合構成、⑥定型表現と分類し、その機能を担うと判断される特定の語彙項目も提示した。コミュニケーション機能別と言語項目のマッチングに対し、表 1 に合わせて社会文化的方略、能力を判断する手がかり、韓国語の社会文化的特質の補足的説明を加えた。紙面の関係上、その一部を表 3 に提示する。

表 3 韓国語の社会文化的特性を反映したコミュニケーション能力と言語項目の対応表(一部)

コミュニケーション機能	CEFR目安	社会・文化方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	言語項目		韓国語の社会・文化的特質の補足的説明 (Korean Supplements)
				種類	項目	
社交活動	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	相手との関係を円滑にするために固有名詞や職位などが使用できる	語彙	○○○선생님, ○○○선배, ○○○씨	人称代名詞をあまり使わない。
	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使える。	語彙	어머니, 이모, 삼촌, 언니, 오빠, 형, 누나,	疑似親族意識が強く、親族名を使って相手を呼ぶ範囲が広い。
	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	相手との関係や場面により格式体と非格式体の使い分けができる	活用形	해요체・합니다체	格式体と非格式体の差の区別ができる。終結語尾と代名詞の待遇レベルを合わせる。
	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	定型表現	고맙습니다	後日、改めて言うことは少ない。 謝りの表現で感謝の気持ちを伝えることはしない。
説得と勸告	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	適切な表現で命令することができる。	活用形	~아/어라, ~(으)십시오	話し手の利益となる場合、授受表現を用いる場合もあるが基本的に命令形を用いる。目上や親しくない人に対しては、疑問形や中途終了文を用いることもある。
	A2	適切な表現で人間関係を良好に保つ	ある事態や命題を否認することができる。	複合構成	안 ~ ~지 않다	2つの否定文を話し言葉と書き言葉で使い分ける傾向があることに注意して適切に使う。上級になると反語表現を頻繁に使う。
態度	B1	対話者の心理をつかむ	適切に謝罪したり応じることができる。	複合	~ 대신 ~겠습니다	場合によっては代案を提示することもある。親しい関係での些細なことに関しては明確な謝罪はせ

¹² この範疇は、「国際通用」すなわち表 2 では設定されていない。この範疇を設定することで「国際通用」で提示されたコミュニケーション機能の設定が変わってくる可能性もあるが、本稿では、修正せずもとの機能リストを利用することにした。

す る				構 成		ず、相手の気持ちに対する共感表現を使うことが多い。
情 報	質 問 応 答	A1	適切な表現で人間関係を良好に保つ	適切な表現で質問を表現することができる。 また質問意図にあった応答ができる。	活 用 形	疑問文・応答文 質問に対して明確な答えを返すことが望ましい。曖昧な応答もありうるが、一般的には明示的な返答が好まれる。否定疑問の使用は限定的である。

表 3 で注目されるのが、韓国語の社会・文化的特質の補足的説明(Korean Supplements) において「～を使わない」のような記述である(赤字で表示)。従来の教材や学習資料では、「何を、どう使うか」にのみ注目しているのがほとんどである。このような記述は、社会文化的適切性を考えたからこそ気付くものであり、特に(3c)に挙げた、日韓対照の視点に立ってから得られる知見であると言える。以下では、実例を通じてこのような側面を詳しく検討していく。

4.3. ケース・スタディ1: 語彙レベル

語彙はその言語の社会文化的特徴を示してくれるものと言われている。外国語学習においては、語彙学習を通じて学習対象言語の社会相や文化の学習が行われるとの見方が強い。日韓の言語学習においても語彙と社会文化的特性は密接につながっている。日本語話者のための韓国語教育用語彙を検討した南潤珍(他)(2019)によると、日本語教育用語彙リストに載っている単語(すなわち日本語の基本単語)のうち、その韓国語対応語が「国際通用」の韓国語教育用語彙リストに載っていない単語は 2,198 語であり、その中 68 語が「門松、下駄、わさび、都内」のような日本社会・文化に関する語であった。数そのものが多いとは言えないが、語彙と社会文化の関連性の一端を示してくれるものといえる。

また、言語使用の場面において社会文化的適切性を確保するために語彙をめぐって気を付けなければならない事項として挙げられるのが「代名詞及び呼称の使用」である。韓国語は日本語同様に、人称代名詞より親族名詞や名前+職位などを使うのが一般的である。そのため、日本語の呼びかけ表現を直訳して使っても問題ないと思われがちであるが、似ていながら異なる部分があるので気を付けなければならない。例えば、名前に尊称の接尾辞(-さん、-氏、-씨、-님等)を付けて呼びかける場合、日本語では「佐藤さん」のように「苗字+さん」の構成を使うのが一般的である。韓国語にも日本語の「-さん、-氏」に対応する「-씨」があり、人名も日本語と同じく「苗字+名前」で構成される。これらの事実だけを見ると、韓国語でも日本語と同じように、「苗字+さん」の構造の「김씨(キムさん)」を使うことができると思うようになる。しかし新聞記事やニュースを除き、ほとんどの韓国語のコミュニケーションでは、김철수씨(キム・チョルスさん)や「철수씨(チョルスさん)」のような「フルネーム+さん」や「名前+さん」の組み合わせが使われる。「김씨(キムさん)」のように「苗字+씨」を使ってしまうと相手に失礼を犯すこととなり、人間関係が難しくなる恐れがある。

このような事実は、言語構造だけを見ては気づきにくく、また韓国語だけに注目しても見えてこない。コミュニケーションにおける社会文化的適切さについての認識に基づき、学習者の母語を軸とした対照の観点に立ってはじめて把握できる現象である。

4.4. ケース・スタディ2: 文レベル

コミュニケーションにおける社会文化的適切さが文レベルで問題となる例として①「質問応答」のやりとりおよび②「命令」における授受表現の使用が挙げられる。日本語では、「明日、時間ありませんか。」

のように否定疑問文を使って相手の状況を問うことが好まれる。相手に負担をかけずにほしい情報を得るやり方として評価される。しかし、韓国語の場合、否定疑問文を使った「내일, 시간 없어요?(明日、時間ありませんか)」は、挑戦的な態度ととらえられる。否定疑問は、韓国語文法規則に沿った構文である。そして否定疑問を使用することがすべての場面で社会文化的適切さに欠けるわけでもない。否定疑問の使用が制約されるのは、「意向を尋ねる」場面においてのみである。韓国語で、否定疑問はある事態が成り立たないことを前提すると捉えられており、事態が成り立たないと思いながらそれに対して相手の意向を探ることは失礼であると思われる。

もう一つの例は、命令の場面での授受表現の使用である。日本語も韓国語も「本用言+授受動詞(くれる: 주다, もらう)」の複合構成があり、丁寧な命令の表現として使われている。しかし、韓国語の授受表現を使った命令は、「그 우산을 잡아 주세요(その傘を取ってください)」のように、話し手が利益を受ける場合に限られて使われる。そうでない場合には命令形を使う(例えば「風邪に気を付けてください」を表す自然な韓国語は、直訳の「감기 조심해 주세요」ではなく、命令形を用いた「감기 조심하세요(風邪に気を付けなさい)」である。この場面で授受表現を使うと、話し手は「聞き手が風邪に気を付けること=話し手の利益」と思っていることと捉えられ、話し手と聞き手の関係についての誤解が生じる可能性が高くなる。

コミュニケーションにおける社会的適切性、日本語と韓国語の対照の観点、といった2つの要件を満たすことで、文レベルでも「使わない方が良い」言語項目の特定ができたと言える。

4.5. ケース・スタディ 3: 談話レベル

談話レベルにおいて社会文化的適切さが問題となるケースとして①挨拶と②謝りのやり取りを挙げられる。

挨拶は、入門段階から学習されるコミュニケーション機能であり、韓国語では定型表現「안녕하십니까/안녕하세요」を使うのが一般的である。この定型表現は朝・昼・晩、何時でも使うことができる点で朝、昼、晩の挨拶表現がそれぞれ定まっている日本語とは異なる部分である。しかし、韓国語の挨拶にも、時間に合わせて異なる表現を用いる方法がある。代表的なのが朝・昼・晩の食事の状況を問う方式である。「아침/점심/저녁 드셨습니까?/드셨어요?(朝食/昼食/夕食はお済でしょうか)」は、「안녕하십니까/안녕하세요」に代わって使われる挨拶であり、ことば通りの意味を表さない、ただの儀礼的な挨拶である。そのため返事の際には、食事の状況に言及せず、同じ質問で言い返すだけでも良いとされる。食べることを重んじる韓国語の社会文化的特性を示してくれる例としても教授されるべき表現である。

謝りのやり取りは、入門段階から学習される、定型表現によるものと、複雑かつ長いやり取りを通じで行われるものがある。謝る事案の軽重によっては、ことばによる謝りだけでなく、代案や代価を提案することも珍しくない。代案を提示することは日本語では社会文化的に適切な行為と認められ難いが、韓国語の場合、最後まで責任を果たす姿勢の表明として評価される。

一方、日本語では「すみません、悪い」など謝りの定型表現を用いて感謝の気持ちを表すことも可能であるが、韓国語では謝りの定型表現を用いて感謝を表すことは成り立たない。

以上の記述から分かるように、入門段階から学習する単純なコミュニケーション機能においても韓国語と日本語の社会文化的特性の違いのため生じる使用上のずれがある。そのため、言葉そのものだけでなく社会文化的適切さを意識し、なおかつ日韓の言語・社会文化の対照の観点を取ることが必要である。

5. おわりに

本稿では、先行研究で提案された、アジア諸言語のコミュニケーションにおける社会文化的適切性の評価基準、そして関連タスクのリスト、そして韓国で提案された韓国語教育のためのコミュニケーショ

ン機能リストを検討することで日本の大学生のための韓国語教材で取り上げるべき社会文化的適切性に
適したコミュニケーション機能を抽出し、言語項目とのマッチングを行った。また、そのマッチングに
おける注意点(知識理解と機能実践を区別すること、大学生のための教材に相応しい学習項目の設定であ
ること、日韓対照の観点に立つこと)を提示し、コミュニケーション機能と語彙項目のマッチングから確
認された社会文化的観点と日韓対照の観点を取ることで把握できた事項を語彙・文・談話レベルに分け
て検討した。

以上の議論で残された問題点をあげることで本稿の結論とする。

- ① 表 1 と表 2 を統合してコミュニケーション機能を抽出する過程で項目の重複や基準がやや鮮明
性化した。これを補う、より整合性の取れたコミュニケーション機能の抽出のための明確で一貫
性のある基準の提示が必要である。
- ② 第 4 章で提示した言語項目とコミュニケーション機能のマッチングは筆者の内省によるものが多
く、その基準と手順を客観化する必要がある。
- ③ 教材開発に必要な要素としては各課のテーマリスト、語彙や文法項目など言語材料のリスト、評
価の基準などが必要である。本稿で試みたコミュニケーション機能と言語項目のマッチングを含
め、総合学習教材に必要な材料を明細していく必要がある。

参考文献

欧文

Council of Europe. (2001). Common European Framework of Reference for Language: Learning, Teaching, Assessment. Cambridge University Press. (<https://rm.coe.int/16802fc1bf>)

Council of Europe. (2018). Common European Framework of Reference for Language: Learning, Teaching, Assessment, *Companion Volume with new descriptors*. (<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>)

和文

岡野賢二・トゥザ ライン・富盛伸夫. (2018). アジア諸語への CEFR 導入に関する諸問題－ミャンマー
での言語教育調査からの示唆－. 平成 27-29 年度 科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 「アジア諸語の
社会・文化的多様性を考慮した通言語的能力達成度評価法の総合的研究」－成果報告書 (2015-2017)
－. pp. 117-134.

投野由紀夫(編). (2013). 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』. 大修館
書店

富盛伸夫・Yi Yeong-il. (2017). TUFUS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標
化. 『外国語教育研究』 20. 外国語教育学会. pp. 207-217

富盛伸夫. (2020). 社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって:アジア諸語
版の試み－アジア諸語を対象にした CEFR 需要で見えてきたものと捉えがたいもの－. 「アジア諸語
の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」－中間報告書 (2018-
2019)－. pp. 73-111.

南潤珍・YI Yeong-il. 2019. 語彙情報に基づいた日本語話者のための韓国語教育用語彙目録の開発.
『朝鮮語教育－理論と実践－』 第 14 号. 朝鮮語教育学会. pp.25-44.

韓文

金重燮. (2017). 『국제 통용 한국어 표준 교육과정 적용 연구(国際通用韓国語標準カリキュラムの
適用研究)』. 국립국어원(韓国国立国語院).

李安九・南潤珍. (2018). 社會的 關係 形成을 志向하는 韓國語 教材의 開發에 대한 豫備的 考察(社

会関係形成を目指す韓国語教材の開発についての予備的考察). 『韓国文化教育研究』4. pp.121-139. 台湾』. 国立政治大学.

執筆者連絡先: namyj@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究(B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(2018 年度-2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686) の研究成果のひとつとして公開するものである。